

空を飛ぶ、遠く離れたところにいる友人と即座に連絡を取る、地球の裏側で何が起きているかをリアルタイムで知る——。人類は科学の力で多くの「夢」を「現実」へと変えてきた。そんな夢を描き、一歩先を空想した物語がSFである。かつての人々は未来に何を夢見ていたのか。そして今、我々はどんな夢を抱いているのか。その答えをSFから探る。

SFとは、「サイエンス・フィクション」の略称である。細かい定義は時代や考え方、作品の捉え方により様々な見解があり、曖昧であるためここでは科学的な空想に基づいたファンタジー作品全般を指す。また、一口にSFと言っても宇宙をテーマにしたもの、未来の日常生活を描いたもの、ロボットがメインで登場するものなどその内容は多岐にわたる。そのため、ここでは時間というキーワードに注目する。

時間は、ごく身近にありながら、目には見えない相対的なものである。昨今、昔に比べて、多くの物事がせわしなく移り変わっている。現代は時間を短縮し、効率化することがもてはやされる時代だ。ここで、時間の短縮について大きく分けて二つの観点から考える。

第一に、移動時間の短縮である。かの有名な藤子・F・不二雄のマンガ作品『ドラえもん』ではそれを「どこでもドア」という方法で可能にした。行き先を念じながらピンク色のドアを開けると、その先にはもう目的地があるという究極の移動方法だ。何しろかかる時間は一瞬で済み、交通費も要らない。そして、長旅によって疲れることもなく、どんなに長い距離でも移動できるのだから。現代では、一瞬で目的地にたどり着くとまでは不可能であるにせよ、世界中に張り巡らされた交通網が昔よりもはるかに高速での移動を可能にした。日本での例を挙げると、江戸時代には歩いて何日もかけて旅していた東京大阪間を現代では新幹線を利用し、4時間足らずで移動できるようになっている。また新幹線よりも早い、リニアモーターカーの研究も行われている。

第二に、通信時間の短縮である。再度の引用になるが、『ドラえもん』にある「糸なし糸電話」というひみつ道具が登場する。この道具は、読んで字の如く、糸で繋がれていないのに自分の声をすぐに相手に伝えられ、さらに当時すでに実現されていた固定電話とは、持ち運びが可能であるという点で異なっている。この「夢」は現代では携帯電話という形で実現されている。かつて文通という形をとっていた通信は、電話の発明や情報通信技術の発達に従いしだいにその間隔を短くしていった。特にインターネットの出現は個人間のみならず、企業と企業、企業と顧客のやり取りそして公的なやり取りのスピードも速めた。今となっては、友人に送ったメッセージにほんの数時間返信がないだけでイライラするというのもそう珍しい話ではない。

これらの時間短縮によって、我々は何を得たのだろうか。あるいは何を失ってきたのだろうか。ドイツの児童文学作家ミヒャエル・エンデのファンタジー作品『モモ』は時間を節約し金銭的、物質的豊かさを追求しようとする現代の風潮に疑問を呈している。「効率的に」生きるために不必要なものを、例えばペットの世話、年を取った母親の話し相手になること、映画鑑賞や読書などの趣味等を極限までそぎ落とし、時間を節約することは、人生から潤いや心の余裕を無くすことに他ならない、そのことに人々は気づくべきだ、と。人生とは、決して寝て起きて働くことの繰り返しではない。むしろそうした必要不可欠なこと以外の余暇の過ごし方と言った個人的な営みにこそ人生の意味はあるのではないか。

人類は、その知性を以て科学を発展させてきた。科学の発展の歴史とは、科学によって人生を豊かにしようと人類が試行錯誤してきた歴史である。そして、SFは科学とその歩みを共にしてきた。今、人類は便利さを追い求めるあまりに、科学の本来の目的を見失ってしまっている。我々は科学技術に使われるのではなく、科学技術を使うのだということを忘れてはならない。

人間の言葉を理解する人工知能、人間よりも優れた能力を持つロボット、宇宙飛行士が滞在する宇宙ステーション——。一世紀前には夢物語として語られていた技術は今や現実のものとなっている。現代のSF小説が描く未来もいつか現実へと変わっていくだろう。『鉄腕アトム』や『火の鳥』の作者として有名な手塚治虫の言葉に、「人間は、果てしなく賢明で、底知れず愚かだ」とある。賢く愚かな人類が、その力をより豊かな人生を送るために使うことを期待したい。